Osaka University Knowledge Archive

Title	群衆の風景 : 英米都市文学論
Author(s)	植田, 和文
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44439
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【35】

氏　　名	植田和文（うえだかずふみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　17263　号
学位授与年月日	平成14年7月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**群衆の風景－英米都市文学論**
論文審査委員	（主査） 教　授　玉井　暲 （副査） 教　授　森岡　裕一　　助教授　服部　典之

論文内容の要旨

本論文は、18世紀後半以降の英米文学において、近代都市を描いた作家および作品を取り上げ、「都市」がいかにテーマ、イメージ、思想としてそれらの作品に定着しているか、そのありようと意味を「群衆」に焦点を絞って考察した研究である。現代英米詩の代表者であるT.S. エリオットを中心にして、18世紀のジョンソン博士、ド・クィンシー、ワーズワス、カーライルらのイギリス詩人および批評家から、ホーソーン、メルヴィル、E.A. ポーらのアメリカの小説家にいたるまで、広範囲にわたる英米作家が深く関わった「都市文学」の作品群を綿密に読解することによって近代人の自我意識の特質を解き明かしている。本論文は、まえがき、序章、本論全8章から構成されており、四六版で総頁360頁（注、引用文献、索引を含む）、400字詰め原稿用紙に換算して約700枚に達する論文である。

まえがきにおいて、都市文学を考察するに当たって問題となる基本的なテーマ、たとえば、孤独な群衆、フラヌール（遊歩人）、自我の不安、都市風景の表象といった、いくつかの重要な概念が紹介され、その輪郭が触れられる。序章では、都市を、ジョンソン博士のように多様で魅力に富む文明の中心と見る見方と、カーライルのように不気味な密集と孤立の場所と見る見方との、二つの相対立する都市観が存在することをまず指摘し、19世紀以降に現れた都市を観察する文学に「三つの視点」――すなわち、塔などの高所、家の窓、路上――が特定できることを、ホーソーン、E.T.A. ホフマン、ポーの作品を例にあげて説明する。以下の各章においては、まえがきと序章で触れられた問題やテーマについての総論的な議論をふまえて、個々の作家や作品に即して、具体的に、都市における「群衆」の諸相が考察される。

第1章は、都市化が始まった19世紀中葉のアメリカにおいて、ホーソーンの「ウェイクフィールド」、ポーの「群衆の人」、メルヴィルの「バートルビー」などの作品には、20世紀の不条理性を先取りするかのように、すでに都市における自我の不安の問題が描かれていることを指摘する。第2章は、ロンドンを大いなる迷宮と見たド・クィンシーには、おびただしい人の顔、アジア的風景、連なる壮麗な建築群、調和の風景といったイメージやモチーフが繰り返し現れる特徴があって、これが彼の都市体験に由来していることが明らかにされる。第3章は、ホーソーンの作品には意外にも都市の群衆のシーンがおびただしく出現することを例証し、この小説家の想像力の原風景に迫る。第4章は、ロマン派詩人ワーズワスの長編自伝詩『序曲』第7巻を取り上げ、詩人がフラヌールとして都市ロンドンに魅了されつつも、都市の意味を解読できぬという困惑を表明する姿に注目する。結局詩人にとって、都市が美しい姿を見せるのは、都市から群衆が消え、都市が「自然化」された時のみだと結論づける。第5章は、都市文学のひとつの典型として推理小説を捉え、ポー文学のもつ豊かな意味を論じる。第6、7、8章は、T.S. エリオットの詩に描かれ

た都市風景を扱ったものである。『荒地』に現れる“Unreal City”が作り出す多義的な意味空間には、幻想を育む都市によって得られた詩人の詩的ヴィジョンが捉えられていること、彼の詩ではシンタックスのずれ、ねじれたイメージ、ゆがんだ風景が密接な関係にあること、彼の詩にはフラヌール的歩行者がよく登場し、この歩行者の意識に近代人の不安、虚無、憧れが表象されていることなど、エリオットの都市詩としての興味深い特質が綿密に分析されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、18世紀後半から現代にかけて展開した近代的な都市文学を英文学とアメリカ文学の両文学にわたって広範囲に研究した本格的な都市文学論である。都市文学と近代人の自我との両義的な関わりが鮮やかに捉えられている。「都市文学（Urban Literature）」の研究は、英米では興味深い成果がかなり出ているが、わが国では、散発的な研究は見られるにしても、その本格的な研究業績にはいまだ乏しい状況にあることを考えると、植田氏の本研究論文はきわめて意義深いものと高く評価されねばならない。本論文の最大の魅力は、都市文学が孕んでいる共通の問題性の抽出、たとえばフラヌールに表象される意識とかアイデンティティの揺らぎといった近代人の意識構造を解明しようとするヴェクトルと、個々の文学テクスト自体がもっているそうした一般化に抵抗する肌理（テクスチャー）に執着しようとするヴェクトルとのあいだで相互に拮抗と絡み合いが展開し、その間にきわめてバランスのよい言説空間が出来上がっていることである。たとえば、ド・クィンシーとワーズワスを扱ったロマン派の都市文学論では、都市と反都市（＝自然）が重層的な緊張を孕んでそこに文学的ダイナミズムを生み出しているありようが、作品それ自体の具体的な分析によって鮮やかに捉えられている。T.S. エリオットの詩の分析では、近代的自我の特質の考察に鋭い洞察を見せる一方で、コラージュの手法やメタ詩的傾向などの特徴が説得的に説き明かされることによって、結果的にエリオット個人の詩的世界の大きさが再確認されることになる。こうした斬新で優れた作品論・作家論としての面は、従来都市文学の観点から論じられることがあまりなかったホーソーンやメルヴィルを扱った論においても指摘できる長所である。また、英米の都市文学を論じながら、その一方で、日本の都市文学を意識していること、たとえば梶井基次郎や富永太郎らの1920年代の詩人やその他の日本作家に言及が見られることも、本論文のふくらみを増していよう。

本論文に対してあえて要望するものがあるとすれば、それは、イギリスのヴィクトリア朝小説や世紀末文学、アメリカ20世紀の現代文学における都市文学も考察の対象になるのでないかということである。しかし、これは、本論文があまりにも刺激的であるがゆえに想起された、ないものねだりにほかならず、本論文の価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。